

Kodak
LICENSED PRODUCT

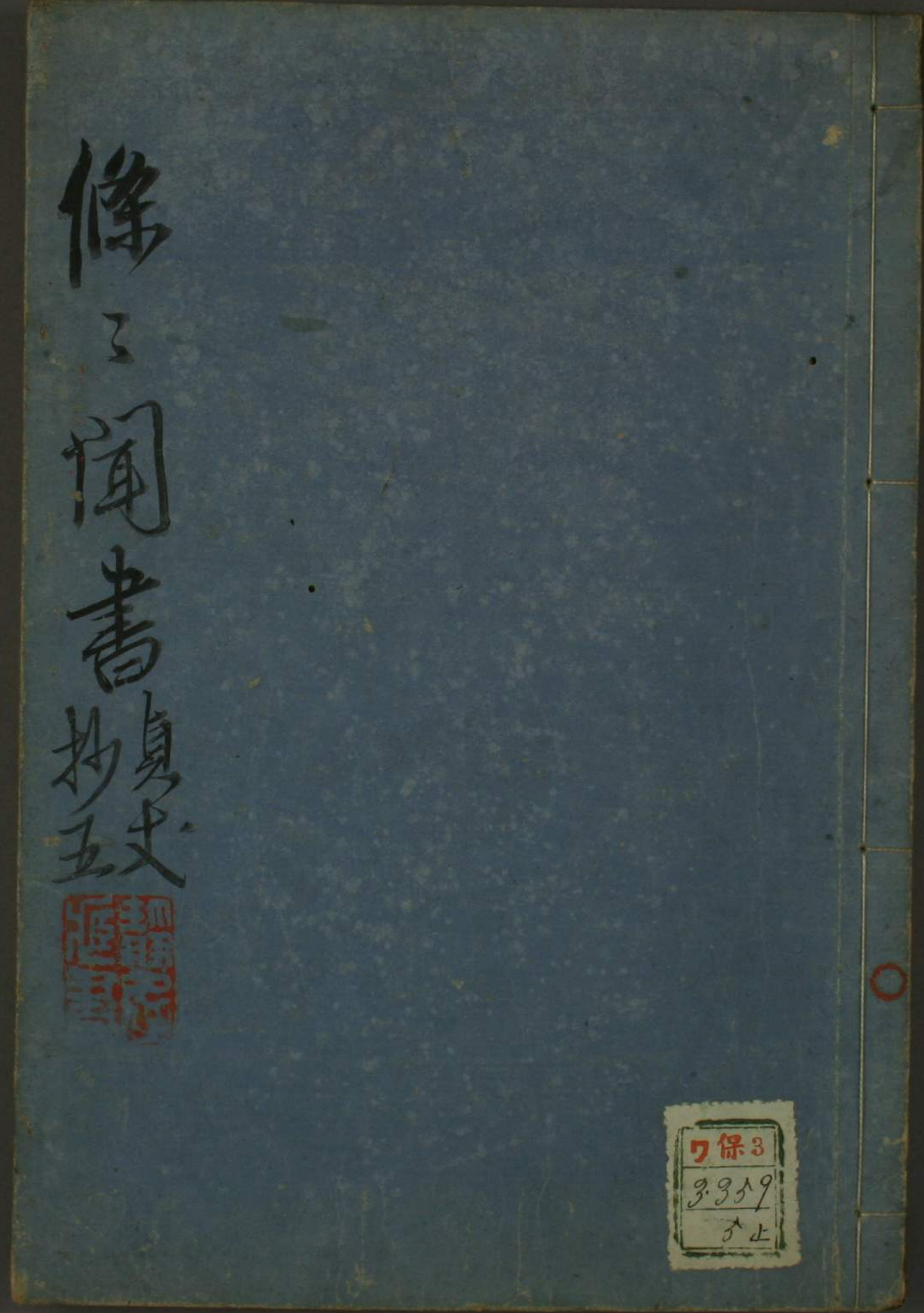
© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Centimetres

Blue	1	2	3	4	5	6	8	9	10	11	12	13	14	15	17	18	19
Cyan																	
Green																	
Yellow																	
Red																	
Magenta																	
White																	
3/Color																	
Black																	

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



3保3
3.359
5止



門ノ保 3
3.339
巻 5止

修く圖書

頁大抄才五

修く圖書

頁大抄

丑

大正十二年四月廿九日
東京府立図書館蔵書
大正十二年四月廿九日
東京府立図書館蔵書

條々圖書

頁丈抄才五



目錄

倣中三編くろ事

文明十二年の比印相傳元由伝元竹下事

右人のトとれ事



條々圖書

貞丈抄卷五

殿中

いぬ事か

公方御印... 白きと... 倉後より洞進... 御所御印...

いはいほ... のまも... すく... かつ...

○... 御所... 倉後... 洞進... 御所... 御印... 倉後... 洞進... 御所... 御印... 倉後... 洞進... 御所... 御印...

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

聖職近トハ公方家ハシタリ
出入シテ武家ノ所用ヲウ
ケタマハル公家教也

少ハ布直金とゆふし一ハ服迫の公家元一ハ布直金とゆふし也依公
家の諸家りも内ノ者ハ布直金と看用セリ也一也一也此ハ大長家
編の直金と用ひし也見も二度後波の記云えり直金ハ元徳内ノ根
依ハ公家也一將軍家りも其内ノ時を少ハ直金看ふし

一月廿六日大右出仕の時三職ハリ御左刀金御進上ハ十五日迄

九月廿五日迄ハ御前ヨ
後ハ八幡ハ新セラシム又細川

淡路も夜を上の御方御笠掛目朝日よりの御持来ハ

御前ヨ立立直ム是ハ殿中ヨリトシム又御代始ハ下の

御祝言の時法家より進上の御左刀御馬御具是等目下

悉ハ八幡ハ新セラシム車ヲ積ミテ吉法寺ハ細川

○正月廿九日ハ朝日二月七日十四日十五日迄書札禮節法書等々ハ
御左刀金と令申テ人ノ若クも令のつきの金具少ク是相トシ
事ハ細川淡路ヨリ御元也○是掛目朝日ヨリ御前ヨ立立直ム
也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也

三職御太刀進上ハ朝日
二月廿七日十五日以上
五日也十四日進上
毎之履申次記録
ホニ右ノ如シ諸圖書
第ニ書札禮節
廿月十四日ヲ入テ二日
ヲ入サルハアマリ九

自是御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也

一月御振取の次方朝日時の御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也

二月御振取の次方朝日時の御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也

三月御振取の次方朝日時の御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也

○振取の御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
○振取の御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
○振取の御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
○振取の御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
○振取の御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
○振取の御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
○振取の御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
○振取の御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也

一 公方振取ハ九月九日の朝ヨリ御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也
百日系ハ又御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也御前ヨ立立直ム也

黒色ヲ用ニハ彈正
官ノ故也

頭書

進考 夫木集卷之三十一
雜部山ノ題ノ中ニ活
題光俊朝臣
新ニ
行ニていふ方ハ
ソノミカノミヤ
ナリト云ル

ふきぎの火熱してあけてしまふは由るに常の伊勢
よ一ッ入の伊勢炭は白炭とて和泉國横心とて布子焼く炭は
てん河對向布子焼く炭とて大沖とて並ん十月朔日より
大沖とてれん立炭とてし私焼よてもきとてしる伊五
炭とてし又女中よとれん伊大沖源氏の繪かきよ
書さる所よ是炭よまひりける大沖也とて是炭は立炭
ぬりて伊勢焼くおろぐん又炭とてしる伊五
て是く男女同

○四ノも横心九ノ昆布九切一付百月年とて年中定例記云今朔より四月迄
ハ又横心九ノ昆布九切一付百月年といふの九ノ
日(四ノ三ノ年中恒例記云今日より五月廿日までは酒の
のいともあらして事せんぬの入料改而より法をきまも酒の
もとすりあらして右の宮の大サヤとつり酒をいふ
と恒例記云由りてあけらるる伊五作事より祇儀にて

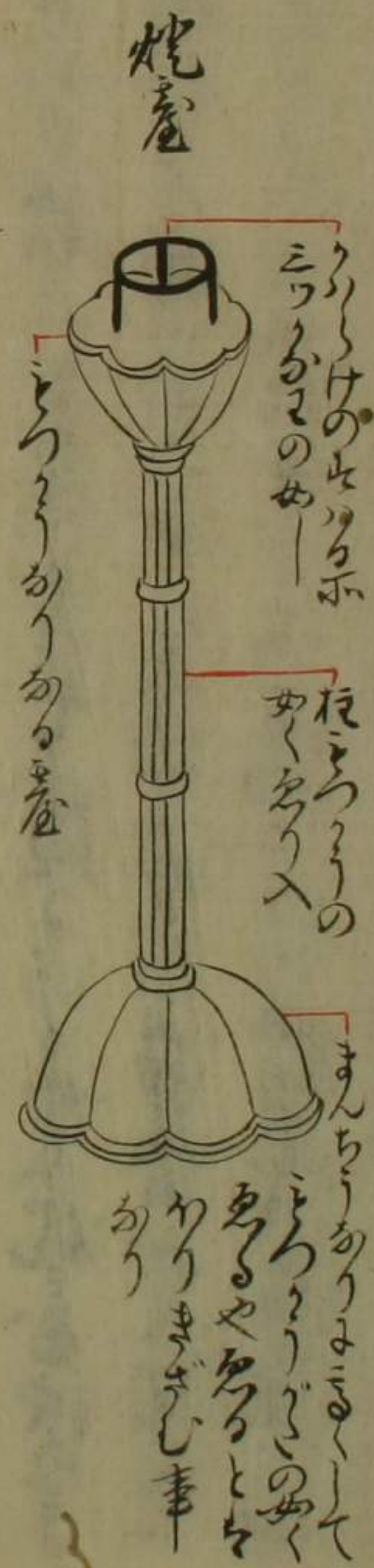
アありて由りてとてとて山大ニ系て由りて
とて由りての由りてとてとて山大ニ系て由りて
大沖とてれん也 ○和泉國横心とて布子焼く炭は
那也和泉國横心とて布子焼く炭は
女も也九テ並ん手不汚故賞之昔ハ毎月運上ス
石也今ヤとてとて也 ○大沖とてしる伊五作事より
をて書さる所よ是炭よまひりける大沖也
つりぬき神と入る也

頭書
油ノキノキノ年
スミテヨム

一 女中方よとてれん伊大ニ系て由りて
す忽内よとれん伊大ニ系て由りて
のつきとてれん伊大ニ系て由りて
伊大ニ系て由りてとてとて山大ニ系て由りて
さすにらふかよとてとて山大ニ系て由りて
てとてよとてとてとて山大ニ系て由りて
かひりきとてとてとて山大ニ系て由りて

上よそり

是も後よあるゆへに源氏の後よりゆき也。油はまら油坏と言ふ油の事也。すなわち陶の字や手すい物ゆへに。白くぬりたる白き葉と申して後なる也。ゆくまんの油つきのまらゆきまらゆき。めつきと云ふは金とくどくまんの油は焼けたる也。まらゆきまらゆき。焼けたる也。油の根は上は根を言ふ也。油の根は上は根を言ふ也。油の根は上は根を言ふ也。



公方御油屋少の御油は、ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

わらまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

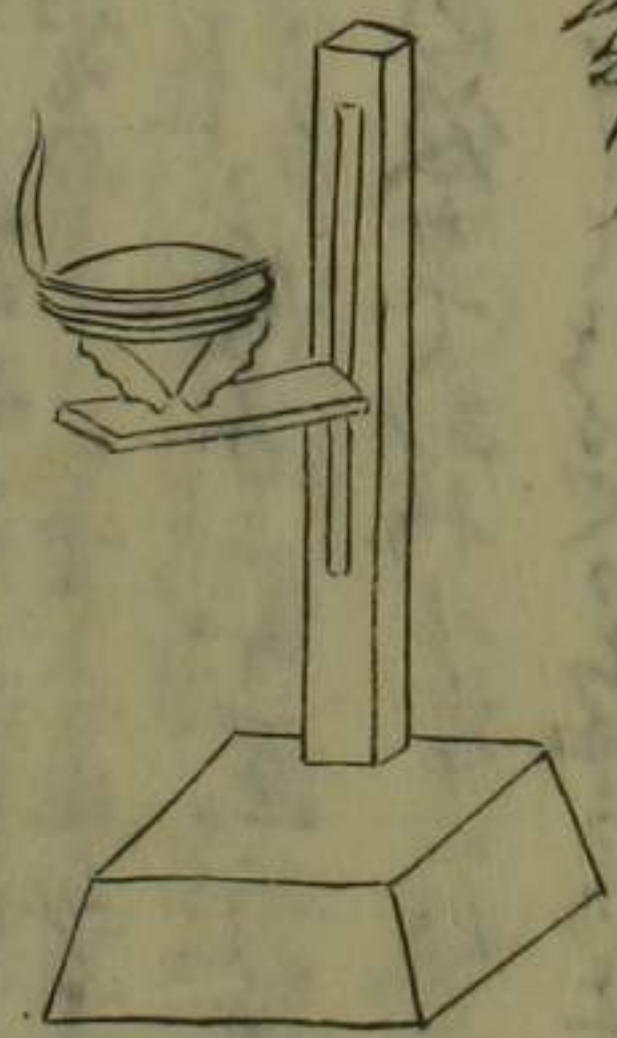
ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

頭書
油坏
スミラヨム

ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

根繁



油入の
あ



ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

一 公方御油屋少の御油は、ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。ゆきたくけい、よそりまら油つきのあかり也。

これに神の中にもうほり上りつゝは多つまはとあり糸といふそのゆゑと云也○
こゝろんをよふこゝろん結まききの事お宿の中は多る物に由新元まきこゝろんを常
の少神のこゝろんたるしとありはまの常の少神の如くやしてゆきまはは長く
大よするく○二つとあるおおとこゝろんをめて二つあり

ほ枕常の如く思ひりやくまら同糸一方めはほ枕一つ時法よ
書く一方めは摸と云歎と書中ム

○ほ枕常の如く思ひ相ゆる也○くゆるとほ枕の思り也○ほ枕常にえ
摸と云歎い思ひ思いと食おとくゆるとよ強く也

夏はうすきこゝろんを一つ並にやム

○婚連元は月より九月九日とこのおおのちうと出りろのうと云し
うとくはうとあり夏のよおんそのうとすしうとすし

仰改帳からちうは中名をこゝろんは子ふか思はしと云
ごう七つうちいば必同朋の役めておろーやム

○ちかよふくちちの乳(羊と云てはるやくちちの上のうはゆる也
七つうちいば七つと云つこ)少川はうちちのよそのまぬ也

夏冬もよほ寝お元一人は毎夜もよほ寝候はほ寝元

とほ一家の月一辰也んやまい人るごしゆは細川御
お痛及ふ伊唱食今一人は一式お痛及此人打く
夜毎は祇候とん女中は出まらまらん事ハ常存也

○伊一家の月と將軍の日月と此は細川島心吉良東条石橋細川に本
荒川今川石堂一と小後里見若松柳井等の家々皆一と云○細川御
お痛及ふ伊唱食今一人は一式お痛及此人打く

頭書
唱食の事希記す
申次記録三所都屋元一色
治部が補政殿上判司が補政直
以上此都屋元と一色補政殿
御代りてを定まて何れ人願ひ
人といふの者中又主事の
候もあはれ何れと云はれ
つて伊希の事希記す

又女中の出らちうは二つはこゝろんは中川角太子ありき
水色さや黒いさぎのつきこゝろん梅澤中川角黒きと云す
黒いさぎとやごう又はうと云のらむ伊勢首氏人
はゆ波と勤りのゆは同首氏也 盛種 秋ハ貞仍 毎日
あげあらうハ女中の上層のゆ波と云のらむ時又其人
とありはてあらうらむ

頭書(通考)

知謂拙記ヲ見ルニ飛鳥中
家譜ニ雅康ト云人母之書
落シテハト將軍家譜ニ文明
二年三月將軍家御齋和
准后入御飛鳥并雅康同雅
親以上四人主テ有遠度ニ
母雅康ニ雅世子ニ雅親
父ナルカ

くあしおとくは後事も事と云作はし一武家いふやうに
Pもいふく組二階堂後ハ政行とはてなと云しし
そしち公家とら一對しての事と云又公家ハ外記官
勢陰陽師とハ賀茂元以下とハ皆必実名と云ふは
公方極一P次披看の時もいふく組賀茂元と竹内松下
かどPたる事と云つる

○我の事と云我と我の事と云名案と云や○俗と云死を并ぬいまい刺
殺せぬ作めて居少ハ一付のもの○三任と云一任はしてと云河○三任
くうありは任はしてと云河○貞富御長ハ我先祖伊藤
貞家や貞家ハ淡路上侍候て者一右名案の下の相長と云て公家案も
よびたり一也代ハ位の侍候てたり也○武家と云ハ公家よりP
ハ有くも武家と云ハ人ヲ對して我右案と云ハ人の名案と云や
いせぬ○二階堂後ハ二階堂を史料官政行と評定元ハ二階堂ハ武家
ありしにも公家對してハ我右案とPよりPと云○外記官勢陰陽師
賀茂元の事と云云○P次ハ公方の考者○竹内松下ハ河内守賀茂
元の苗氏あり

一 常徳院殿御代よ大進おまひくはるつる苑の御所七圓の

少殿の糸のせむきい少庭は纏といはせしりて也統多古ム

内ハ由人教為申細言後令他寺 貞宗 貞隆 同故勢州 貞隆

小室系民部少輔及伊勢方同膳も後小室系刑部少輔後 干時 干時

堀和九系亮 干時 也後令他寺の和少千足かどはる

つるに付ハ大名少佐元少中由組も是系いつる人の日元少

細川盛由元秋庭御中も 元重 常良御前も多賀量後

言忠 召加(らしん)一也後事ハ度々検見かどとはいつる弓

馬の真加白目たぐひるも事ハ又御あ止の時ハ布旋下也

召加(らしん)一又さるの時の由人教大館藤州入道後

常良の事也 俗名尚氏 の外ハ我ハ足弟残りさるかいあかん

一 東山殿（伊後）より伊供元少八

大館刑部大輔殿

白山中務少輔殿

政通

伊勢守殿

伊勢因幡守殿

貞誠

○ 延昭院義政公東山へ後りあり。年月たゞ、あらず。文明五年山陽守常徳院義尚公、將軍職とつり。つりて、同十一年、東山は浪園とす。同十一年、義尚公、河判始りて、河父義政公、代りて、天下の政をとり。つりて、伊勢守殿、貞家也。

河親重元

細川治部少輔 政信

一色式部少輔

義遠

○ 伊勢守元のもの、糸より、ええり

申次

大館刑部大輔殿

白山中務少輔殿

伊勢因幡守殿

伊勢右京重元

貞遠

伊勢上野分後

貞江

走元

後及任後守殿

及任部中務少輔殿

番元

伊勢守番元と河守も同事也

同朋

吉阿

朔阿

以下少

常徳院殿

一 京河新極より伊相伴元伊供元弟のより

申次

大館治部大輔殿

上野民部大輔殿

伊勢守元弟少尉

貞家改初、宗五

伊勢守元弟少尉

盛隆

伊勢七郎左衛門尉後貞後

○伊勢次郎左衛門尉貞頼いさなりの作者之政仍とい元貞仍といこと
後より仍の字と改めて貞頼といや字五貞頼利繁とい字五入通といこと

走丸

竹屋後

遠山左衛門尉後

廣三刑部左衛門後

河内民部左衛門後

能勢後

市朝左衛門尉後

角田後

小坂後

市辺江守後

海部伯耆次左衛門尉後

河原左衛門供元

妙善院殿

○河原左衛門伯耆次左衛門尉後
河原左衛門伯耆次左衛門尉後
河原左衛門伯耆次左衛門尉後
河原左衛門伯耆次左衛門尉後
河原左衛門伯耆次左衛門尉後

大和左衛門後

千秋中務左衛門後

松田備前守後

安房左衛門後

松田左衛門尉後

之上兵庫尉後

堺和筑前守後

○松田備前守左衛門尉後
松田備前守左衛門尉後
松田備前守左衛門尉後
松田備前守左衛門尉後
松田備前守左衛門尉後

公方左衛門尉後

○憑の字はたのむといふ又たのむといふ
憑の字はたのむといふ又たのむといふ
憑の字はたのむといふ又たのむといふ
憑の字はたのむといふ又たのむといふ
憑の字はたのむといふ又たのむといふ

勘奉行

勢別

○勢別は八朝は法家といふはたのむの勢をいふは勢別なりといふ勢別を
我先祖伊勢守也

伊勢守左衛門尉後

伊勢守左衛門尉後

貞後

○内とくうひ方と八年中定例記云云とくうひ方と八年中定例記の物と云うは
 事と云うは事柄をとりて受せしむる是と云うは中は元叙模と云うは
 同朋元と云うは千足り也又云而述一のゆひと云うは八の元と云うは四述一の
 分と云うは述家のより物取上りて中述れを付と云うは物と云うは酒で
 述と云うは極率度中述りて物と云うは是は公方極中自元と云うは
 中と云うは傷と叙模と云うは中と云うは中と云うは右と云うは中と云うは

この右筆

下筆後

○この右筆と云うは外の字の四とくうひ方の物と云うは中と云うは
 中と云うは公方極右のより物と云うは中と云うは中と云うは中と云うは

かゝ物と云うは 中と云うは中と云うは

相阿

○くゝ物と云うは唐と云うは唐より物と云うは唐の物と云うは唐の物と云うは
 唐の物と云うは唐の物と云うは唐の物と云うは唐の物と云うは唐の物と云うは
 唐の物と云うは唐の物と云うは唐の物と云うは唐の物と云うは唐の物と云うは
 唐の物と云うは唐の物と云うは唐の物と云うは唐の物と云うは唐の物と云うは

江次乃伊と云うは

吾阿 洞阿 台阿 夏阿 伎阿 越阿 軍阿

○江次乃伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは
 伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは

伊新侍 伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは

○伊新侍と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは
 伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは

○伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは
 伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは

○伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは
 伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは

伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは

伊勢次第金尉

伊勢又七

○伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは
 伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは伊と云うは

東心殿 伊後の後 右筆

伊勢又七

伊勢次第金尉

題書
 分一三一本三の
 トアルハ非

同朋元ふともくうりは

○西よりひさのふち系に記す ○このふち外の右筆に系に記す

一 伊豆権のほう方 妙喜院藏

伊豆くくひ方の右筆

伊豆同郷の友

この右筆

早野宮の捕友

ちくくひ西よりひさの右筆

大鑑詠列

○大鑑詠列ハ大鑑伊藤も尚氏ハ入道トテ常具ト云

一 抄裏板(伊進上の目録ハ勝州洞よりひさだん一板)

高ハ伊使ハ信奏伊進一も伊使同系

○伊進上ハ伊使のひの伊進上 ○勝州ハ伊藤也 ○高ハだん一ハ大寺檀御也

○信奏ハ武家信奏トテ武家方の名次ト一ハ公家名次ト一 ○伊進上ハ伊使同系トハ抄裏板より公方ハ伊進一の伊使ハ信奏の公家名次ト一

一 公方板より流家(の伊進)目録ハ是ハ亦よりて甲川合

又ハ亦川合とも云用ハ一板あるト一系ハ伊進ト書ケル

返の名と可書

○流家(の伊進)ハ流家以下門端公家名大右東(の伊進) ○一板あるト一ハ

目録と板一枚ト書ケル ○伊進一の名と云ハ伊進の板ト書ケル也

伊使の在所公家ハ伊進末段一系段二系段三系段四系段五系段

六系段ハ九系段ハ亦公方

院も連院實相院大光寺 伊使ハ板ト云ハ

○九系段ハ亦公方ハ伊進末段ト云ハ亦公方ハ伊進一の名と云ハ亦公方ハ伊進一の名と云ハ亦公方ハ伊進一の名と云ハ

亦公方の板ト云ハ伊進末段ト云ハ亦公方ハ伊進一の名と云ハ亦公方ハ伊進一の名と云ハ亦公方ハ伊進一の名と云ハ

聖人の五百年の事
 史記評林諸史總評
 鄭淵曰仲尼既沒諸子
 百家興焉其各異也
 而孔子之於春秋
 在斯上曰馬遷が史記
 ラアラハスヲ云又云孟子
 公孫丑下篇云五百手
 必有王者興其同必有
 世者朱子註曰自堯舜
 至武王皆五百餘年而聖
 人出

一人の世あるべきや大方三皇の代は至徳より人の中
 古より人の中古より人の中古より人の中
 一なるの世あるべきや

○この人の世あるべきや大方三皇の代は至徳より人の中
 古より人の中古より人の中古より人の中
 ○我々の世あるべきや大方三皇の代は至徳より人の中
 古より人の中古より人の中古より人の中

一 女はいついどいつか
 一 女はいついどいつか
 一 女はいついどいつか

一 女はいついどいつか
 一 女はいついどいつか
 一 女はいついどいつか

○九代将軍の同家老職と勅り
 ○貞観政要の書の名は貞観の唐の太宗
 とり天子の時の年号と太宗の時の政の書と書る也
 ○神武系も書の名に
 人王公平代後堀河院の御時備倉代めの御軍部御師の代は貞永元年
 政事の法式と定めて書しと書と貞永元年と云也
 ○神武系と云はひのり
 神武系は神武の御時備倉代めの御軍部御師の代は貞永元年
 貞観政要の御時備倉代めの御軍部御師の代は貞永元年
 貞観政要の御時備倉代めの御軍部御師の代は貞永元年
 貞観政要の御時備倉代めの御軍部御師の代は貞永元年

○九代将軍の同家老職と勅り
 ○貞観政要の書の名は貞観の唐の太宗
 とり天子の時の年号と太宗の時の政の書と書る也
 ○神武系も書の名に
 人王公平代後堀河院の御時備倉代めの御軍部御師の代は貞永元年
 政事の法式と定めて書しと書と貞永元年と云也
 ○神武系と云はひのり
 神武系は神武の御時備倉代めの御軍部御師の代は貞永元年
 貞観政要の御時備倉代めの御軍部御師の代は貞永元年
 貞観政要の御時備倉代めの御軍部御師の代は貞永元年
 貞観政要の御時備倉代めの御軍部御師の代は貞永元年

日中国の事と云はれし一侍しる者誠人の志用も
多しとるべきとや私とありしふもさしととなげし
まづしひを侍しきし故人の書並あり

○ある侍しは侍る也 ○ある侍し侍しは侍る也 ○ある侍し侍しは侍る也 ○ある侍し侍しは侍る也

又人の内は諫臣として常よりききしとありす人乃
ゆるが侍りめてふき事めこと葉ふがけしども能く
たはけ毒にあはけしども後よ病とをす昔のしこ女

帝ハ諫言とあてて主人と評しあひしとあり
諫の字は侍る也 ○諫の字は侍る也 ○諫の字は侍る也 ○諫の字は侍る也

一

ある侍りよ夫より人ハ約とありしゆるべきと
ある侍りよ夫より人ハ約とありしゆるべきと

せぬ中義時羽后もかりしなり

ある侍りよ夫より人ハ約とありしゆるべきと

○ある侍りよ夫より人ハ約とありしゆるべきと ○ある侍りよ夫より人ハ約とありしゆるべきと ○ある侍りよ夫より人ハ約とありしゆるべきと ○ある侍りよ夫より人ハ約とありしゆるべきと

かゝの國も盟とて牛の血とて起法命の格
賢約とる也今も一揆かどしていさかしのゆるめ大
く君子ハ周くして比せずとてよき人の堂とありし
ある侍りよ夫より人ハ約とありしゆるべきと

血をどと吞けるや三皇五帝かどの代めはるるものも
 一とまてゆるたぐ上とのあまぎく私の一揆かひなる事
 こもゆるゆあし小人に比すともまらき者のありまうて
 堂となてくもゆるゆも中ゆるゆの返く何きいて
 盟とトももある合戦の時こそまらきあしは合もまら
 の時一揆もまらきめきあうさる事もあはれ私
 契約かひあるべき也

○盟の字はちくひとよみて誓言とて約束とひくするもの○牛の
 血とすりては唐土の昔踐國の時血國の大各り合せて一味同心成る約
 事とする時と唐土牛と川を渡しては約事と誓する者所は牛の血
 まのりしてとてその牛と割て各血とする誓言なる○今もまらき
 必とい牛の血とする事○君子は周くして比せしむる人上人と交
 るは誰もは周く同一様と交りて比せしむるゆあき也比ふ秋と同なる
 者といはるるもの君子は貴人○堂とらるるは徒然と
 ひまひくさるる事○三皇は帝と比す○五帝は伏羲神農黃帝堯

帝舜帝也け五人は唐土の上代の天子とて聖人○まらきゆは左の
 幸と牛の血とするものと云○小人とい何もあはれあらうる人と云○
 一揆は大勝の人心と一揆とてまらき事と証す云○今もまらきの
 時合戦の時一揆もまらき也○一揆も牛の血とする
 事一と云○上とのあまぎくと云はる君子とやゆひあがめをみ

一人の心の月よあの一とと思ふべきもそのあは井の内乃
 かつるのゆとあの一と宮殿樓閣とおひ大鵬と云る
 一羽は千里かけるも作野とてあまらうるもの二三寸
 とさぶもその時のため一と同ゆとトはすらひあはる
 人も心とあまらひる事こそあの一ととさるゆことなり
 むことなり也

○宮殿の結構なるは殿○樓は二階作の家○閣は二階作の門○大鵬
 樓閣もよ何とも結構なる家作と云○大鵬と云るはま大ゆるもの
 一羽は千里と云はるもの千里と一のまらき○作野といはるは野
 なるにまらきと云はるもの○大鵬といはるは鳥なるもの○作

大鵬は鳥のたぐは莊子
 も書はるるなり
 一とと云るは
 一とと云るは

一 一の文も此の日記も諺言と云ふものなり

事とゆるや町の國もさうものであり成王とトリス
帝ふも周公且といふべき聖人ののでなくおまはり

とありき見方又諺言一のひいと帝内と云思
めてさうをけらしとて何風あつて世の中さう

とて事あもつても秋の田のこともせんぜーと周公
且成王の父武王の命よと云預書と物の中よりと

とあつて見方と忠告の人なりとをぐるめ一返されて
諺言一なる方二人誅せしめてこそ世いめでさなりし

源氏の大將継母のそのこと源慶へかされぬの時
毎風すすすをくけるは周公の故事とくけり

頭書
かノ字スミテ
ヨムレ

頭書
けテ命もさあゆまの
より又推法治學の
も又えり

管叔ハ周公ノ兄也
蔡叔ハ周公ノ弟也

○此回といひ物と云うて云○諺言はこがもあき人とあつてありと云ふ
こがもあきと云うて云○成王は周公
の天子と云武王の子○周公且は武王の弟なり成王のうしろと成王の
為すは知れぬ○めえとあつてはつて彼は治る○あき足方ハ
管叔蔡叔と云二人周公且の兄弟と云人も○さうをけり○周公
公且の役使と云はけり退けしと云○何風と云はこがもあきと
こがもあきと云うて云○天を愛りて大風をさげ○大はあせると周公
且ハ聖人なるをわいかりしとあり○秋の田のことハ田の稲粟
を食ふものなり○武王の命よと云預書と云武王の病なりと云
時武王の命よとて我命と云うと云○預書と云金縢の書と云也○預書
ハ書經の中は載せて今も傳りたり○誅ハころす○源氏の大將ハ光
源氏の大將○くけると云紫式部が源氏物語と書るに源氏物語ハ
仰りおぼゆるは光源氏の源慶の備へ流されたりと云周公且の命
を用ひてはるやあつてあつてさうと云うるは源氏物語源慶の巻に
又えり

又めでたいたのしよヤサ延長の帝も時平のおとら
諺云よりて山部の中事も傳りし也

○のでさきと云うて云○延長の例は延長の四代と云ふは
云也○延長ハ人王六十代醍醐天皇の御代の年号也○時平のおとらハ

高辻家ノ祖也延喜元年
正月廿五日左遷同三年
廿五日遷行年十九天慶
九年遷都于北野

剛院左大臣也時年八名多之大臣の三宮と御まふことしに時年公遷を
以て道真公とこふよおして御業へ後まふことし道真公は後上野
の天神といふひや也

源倉の右ちお家のゆゆも推原京時の謄言よりて
向ふ人のそんトゆりしと也

○源倉の右ちお家の頼朝也○あまの人のそんゆりしと義経朝臣と
始として多くの人の謄言してそまのほまもあつたるに東遷見たり

ある抄あまける女のそんたいのの大小こまのけい父よ
あまのそん人ともうていまよまのいひ老ては子よまのいひ也
是と云從とらり也源氏のお治かとももこつよまのいひよとか
けり先女いひもむやうくまあるして昨日中國に和國
とて女も治めゆる一き也天照を神も女神もつとてせ
めふり神功皇后とゆりし八幡大菩薩の母也

向ますゆり新羅言罷百海國とせあまびりしてげ

あ一系の國とあまのいひ

進退ノ二字ヲフルモ
トヨミテ身ノフリマヒ
ノ度ナリ
（は）年もさよの神の
あり又熱法居家

○女のそんいひと女の男のそんいひと云ふは進退一本も身神とゆり
也○口まきけい初めの時○人とありて成長して也○こまも
くあ席に從之○和國と書てやうくぐもむいひ女も治ひ（和國と
云也）天照を神ハ伊弉諾尊のいひと也○神功皇后ハ人王
代仲哀天皇のまきき也○八幡大菩薩ハ仲哀天皇のつとて母ハ神功
皇后に應神天皇と云ふハ八幡のいひ也○新羅言罷百海國ハ三國の
谷といふ國と後よりつとて今ハ朝鮮國と云ふ○あ一系の國といひ
如のゆりこまありの國とも云也

又昔も推古天皇とゆりしも女神めて朝の政と行ひ

のひの時聖德太子推政いひて十七ヶ條の憲法を
定めさせあひたり皇極將統元明元正孝謙のむけい女
神とて御位よけき政とゆひせとあまのいひ

○推古天皇ハ人王三十四代の天子女帝也○朝ハみりてまて禁裏の
聖德太子ハ用明天皇のつとて子殿戸皇子と云也○推政ハ天子のゆりる也

菅原為長卿ハ高辻家
先祖也官位參議正位
三至元寛元四年三月廿日
薨行年七十九

二代ノ將軍ト頼家公
實朝公也

也○十七ヶ条の宣旨にハ法式と書くる書也○皇極天皇ハ三千六代の子
也○持統天皇ハ四百一代之天子也○元明天皇ハ四百三代之天子也○元正
天皇ハ四百四代之天子也○孝謙天皇ハ四百六代之天子也以上五代も
女帝也若くは女もあはゆるべき國と云ひしは流傳也

○わろこゝのやびのふあゝあや
○わろこゝのやびのふあゝあや
○わろこゝのやびのふあゝあや
○わろこゝのやびのふあゝあや
○わろこゝのやびのふあゝあや

迎くハ謙倉右大將頼朝卿の北の方二位殿政子と申せ
ハ北条四郎時政の息女とて二代の將軍の母也大將兼
去の後ハ一向謙倉とて管領一あひいそとく成敗
ありし也負觀政要とて書十卷とて菅原為長卿
とてり一人ハ和字ト書せて天下の政のたすけとて

ありし也義時
羽后も徳大右と知しありし也

○北の方ハ妻也南ハ陽也北ハ陰也男ハ陽也女ハ陰也信々ト云ふ人の妻と云
北の方ト云ふ○二位殿めいハ頼朝兼家之後建保六年政子誕生二位ノ
叙ト云ふハ二位殿ト云ふ政子ハ二位殿の各也○北条四郎時政は建保
五年頼朝の舅とて執権職也○大將兼家ハ頼朝正室也○菅原為長
卿ハ和字ト書せて天下の政のたすけとて

かくて光明寺尊嚴の末のゆき子と謙倉ハヤト一養子は
せり將軍の宣旨と云ふあり七条將軍頼經公と申せ
也此將軍のゆき子貞永元年ハ甲午一ヶ条の式目とて定
けりて今も武家の禮と云ふもやそれハ男女ノ
すべ心もくくかすす心也道徳行々かか人
肝要と云ふしと抄あはゆりし

光明寺開白道家の
九年慶ノ先祖也建長四年
二月廿日發行年六十一

○くくつおと云よ同じ希とうけて云○光明寺の御開白道家の
○養子とい実明公の養子○將軍の宣名とい御軍まよ作身付天子より
○下書きあり嘉祿二年正月頼朝征夷大将軍上御宣り○貞元
○年の中一十條の式月改書の法式と記しる書に希と云

一 推談治要の中より人の威勢は吾面よりして道理と志
 する人といくらあそきて誠は帰伏する事なり又其理非
 道の人といくらあらしめても争ふ事勝るものなり三人の利
 敵は箱の中といふも人をしてあそむといふばりの勢ハ
 百里の外より争へるまゝ一をどけ去るごとく又猛虎深山
 よりあはれ百の獣あはれきまゝ麒麟は角の上より肉よりよ
 かりていきおひあはれも人と破らず聖人の威ありて猛
 虎すすむれいまり

○推談治要の書の名に一條抄改書良公の所作○吾面よりして
 吾人も威勢なり吾人も威勢なりと云○道理を知る人といふ

あして誠は帰伏するといふは吾人の威勢は帰伏する考と云いあ○吾
 那なの人といふはあつて公の争はず勝る事ありといふは吾人の威勢
 也○利敵は箱の中といふも人をしてあそむといふばりの勢ハ○あま
 ぬどけ去るごとく又猛虎深山よりあはれ百の獣あはれきまゝ麒麟は角の上より肉よりよ
 かりていきおひあはれも人と破らず聖人の威ありて猛虎すすむれいまり

ひかりて誠は帰伏するといふは吾人の威勢は帰伏する考と云いあ○吾
 那なの人といふはあつて公の争はず勝る事ありといふは吾人の威勢
 也○利敵は箱の中といふも人をしてあそむといふばりの勢ハ○あま
 ぬどけ去るごとく又猛虎深山よりあはれ百の獣あはれきまゝ麒麟は角の上より肉よりよ
 かりていきおひあはれも人と破らず聖人の威ありて猛虎すすむれいまり

ひかりて誠は帰伏するといふは吾人の威勢は帰伏する考と云いあ○吾
 那なの人といふはあつて公の争はず勝る事ありといふは吾人の威勢
 也○利敵は箱の中といふも人をしてあそむといふばりの勢ハ○あま
 ぬどけ去るごとく又猛虎深山よりあはれ百の獣あはれきまゝ麒麟は角の上より肉よりよ
 かりていきおひあはれも人と破らず聖人の威ありて猛虎すすむれいまり

ひかりて誠は帰伏するといふは吾人の威勢は帰伏する考と云いあ○吾
 那なの人といふはあつて公の争はず勝る事ありといふは吾人の威勢
 也○利敵は箱の中といふも人をしてあそむといふばりの勢ハ○あま
 ぬどけ去るごとく又猛虎深山よりあはれ百の獣あはれきまゝ麒麟は角の上より肉よりよ
 かりていきおひあはれも人と破らず聖人の威ありて猛虎すすむれいまり

中人にては初の一念よりふしとすそのまゝとるまひか
いすふいば台座の分別をくは徳とて去りて道に
いさふと思案するべき事人の心も教訓も又是も入
まじくは我とる理とて思ふまじらるべき也人にては我を
のゆく事ぬは道徳と修けぬはたふゆとて思ふと思ふ
ぬひ也徳々分別あるべし我を思ふとてあて人の道
徳とて思ふもいよばたまきの徳なきごとくしとて不
我初の一念と捨て去実の心徳とていひまじとて思ふ
はく我とて思ふとて思ふとて思ふは我とて思ふ
しぬ中人なる人といふは徳とて去りぬは徳とて思ふ人
にて我とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ

中人事あるゆも事あるべし其のゆもとて思ふとて思ふ
その心徳とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ

○心の徳とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
○我の心とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
○我の心とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
○我の心とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
○我の心とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
○我の心とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ

一人ハ大才なきもいよば人々の為に辛苦とて思ふとて思ふ
おち不順とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
と存す一き者也思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
法人子施とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ

をどう思ふか佛神のおくすしとくつらむるべきもの

○石版の如く○蓋と名をきき天下の為人民のるま言ひのまをせ
とや○才は加ふ所の多浪に随つてよ月の多浪おほし○徳と徳とまき
よ人のるま加ふ所とすま○おくまきとつらむるまきのことあは一本
ふかくまきとつらむるまきとあり

一 恩と名をきき人の名を歎かむかきつる用の時つらむる
かきつるまきとあり

○いふまきと用のあるかきつるまきとあり
○あまのまきとあり
○あまのまきとあり
○あまのまきとあり

一 聖徳太子のたまひし五戒の詔は内典は五戒あり

○聖徳太子のたまひし五戒の詔は内典は五戒あり
○義礼智信の五徳と内典は佛法のありと佛書のありと内典
といひ佛書のありと外典と云也○五戒は佛法のありと内典
盗戒邪淫戒妄語戒飲酒戒ことと五戒と云也○内典は五戒也とい

頭書
五戒と名をきき
五戒と名をきき

儒書の五常は佛書の五戒と同一のことと云ふ五戒は内典は五戒といふ
儒書の五常は佛書の五戒と同一のことと云ふ五戒は内典は五戒といふ
儒書の五常は佛書の五戒と同一のことと云ふ五戒は内典は五戒といふ
儒書の五常は佛書の五戒と同一のことと云ふ五戒は内典は五戒といふ

仁は五戒の第一なり他は四戒とありと云ふ仁は五戒の第一なり
と云ふけは五戒の第一なりと云ふ仁は五戒の第一なり
と云ふけは五戒の第一なりと云ふ仁は五戒の第一なり
と云ふけは五戒の第一なりと云ふ仁は五戒の第一なり

○五戒の第一なりと云ふ仁は五戒の第一なり
○五戒の第一なりと云ふ仁は五戒の第一なり
○五戒の第一なりと云ふ仁は五戒の第一なり
○五戒の第一なりと云ふ仁は五戒の第一なり

とありていさあるはと義と云

○富てあてりすと賊室はなあれども我々があてりて者どもあり
○後て能くしと賊室は後たたくは人よとるこ
○主なる地は存すも時りすとい天は言ふも少くもめし上の言ふも
○我まよせぬたよよ云々○あよそいあてりて人よ先づるこ
○あると氣とありてあるこあきとげこいむと云一本いあるとよと
○向ふ形といあるとよと用し

礼は君と孝ととび子親は孝と孝は兄ととび
老るととやまひて上りてあかす下りてさびり
句すはと名付て礼と云

○居人のめりつひを云人々○君い人々○孝は孝なり○上りて
あかすはとよと位の人ハ下りてあかすはとぬ○下りてさびり
句すはとよと年とよと人よとやまひて

又智は心ゆく海くの文を考ひてあはひる万は慶す

道一古記とさるの類きとさう大方三度思ひて此記
分明なりと智と云

○海くの文とさるの書籍○古記とさるの類きとさうとい昔の
き事とさるの記きとさるの類きとさるの類きとさるの類きと
さるの類きとさるの類きとさるの類きとさるの類きと

信ハ心ゆくて詞正と道は向くさるは行せず吾は信
と信と云

○道は向くさるは行せずと云○心ゆくとい人とは
○内知とさるは行せずと云○内知とさるは行せずと云
○内知とさるは行せずと云○内知とさるは行せずと云
○内知とさるは行せずと云○内知とさるは行せずと云

ラウマク モシマク
老老文育事云々書ちぐ又あ字も可なり
努々懐入ひく

大永八年正月日

下総入道 号魁世次
宗五判

七十四歳

次郎後

大永八年ヨリ明和五年
三十四年也

右ハ奥書也。老老ハ初ハケシ也。年よりてとわけらると云あり。文育ハ
ハ書文せずめく同布と云ふ。努々ハ字ハ片とめても又ち
らと用ひたり。懐入ハ入とハちくとしてくハ人の名なり
と悟る。老老文育ハ早下ノ詞也。大永ハ人王百五代後柏原院の
御代ノ年号也。八年ハ成子ノ年也。八年ハ天子御代啓りて百六代後
奈良院ノ御代と云ふ。八月ハ月也。年号も改元有りて亨禄元年と云ふ

將軍ハ孝氏公より十二代義晴公ノ御代也。下総入道ハ伊勢下総守
貞頼也。ハ孝々ハ少書ノ作者也。元ハ次郎九郎ノ所也。後ニ下総守ト云
也。谷字も元貞仍ト云後貞頼ト改なり。宗五ハ貞頼ノ法名ト判發
してハ総入ト云ふ。ト云ハ。魁世ハ貞頼ノ書文也。各ト云ハ
孝文也。七十四歳ト云ハ。大永八年より年記ト云ハ。不也。此
唐正元年子貞頼也。義政公ノ御代ニ義尚公義植公
義澄公義晴公ハ五代ノ將軍ト云ハ。人ト云ハ。次郎後ト云ハ。宗五ノ
嫡子次郎貞茂也。貞茂後子判發ト云ハ。宗五ト云ハ。貞頼ノ家々
伊勢用懐守ト云ハ。方也。我々先祖伊勢貞信ノ嫡子ト云ハ。伊
助貞行ト云ハ。貞行ノ弟ト云ハ。伊勢用懐守貞長ト云ハ。是田懐家ノ元祖也。
貞長ノ嫡子ト云ハ。貞直ト云ハ。貞直ノ弟ト云ハ。上代分貞房ト云ハ。貞房ノ嫡子ト
下総守貞牧ト云ハ。初ハ次郎九郎ノ所ト云ハ。貞牧ノ嫡子ト云ハ。貞頼ト云ハ。宗五入
是也。貞頼ノ嫡子ト云ハ。貞茂ト云ハ。是初田懐守ト云ハ。二男ノ所也。元ハ。次郎
ト云ハ。也。在系圖ト云ハ。向ト云ハ。也。

桓武天皇十九代

○ 貞信

伊勢守
從五位上
侍從

嫡男

貞行

兵庫助
伊勢守
官位同上

伊勢守嫡男代々續至貞丈

二男 貞長

因幡守

嫡男 貞直

因幡守
加賀守

因幡守嫡男代々續

三男 貞清

備前守

二男 貞房

子一
左衛門尉
上野介

貞牧

次郎左衛門尉
下總守

三男 貞弥

左衛門尉
又七郎

貞頼

次郎左衛門尉
下總守宗五道

四男 貞雅

駿河守
五郎

貞茂

次郎
宗悦入道

伊勢下總守貞頼、秋、下總守貞清、
秋左のこ

家貞

下總守貞頼

思ひよる思ひこそかけし人て海ありそは、神よをけりや

貞丈三は秋貝よくひふれとらふるとよせ人のあきまはらういと
いひあふいと波よまをさう秋の言いまひまふ人のあきまはらう
我がまはらう神よをけりや秋の言いまひまふ人のあきまはらう
おけきしる也河もんもおけり秋の言いまひまふ人のあきまはらう
又て貞頼の女屋のやうもおけり秋の言いまひまふ人のあきまはらう
こそいふまはらう秋の言いまひまふ人のあきまはらう
いふまはらう秋の言いまひまふ人のあきまはらう
とらふこびくの秋の初とらうて

貞丈

思ひよる思ひはらうたりも志をまふとて姉このをまはらうや

元文三年ヨリ
明和三年マデ
三十九年也

右條々書書の抄に去元文三年戊午の去大い系
業と認めし事一もあやほし事一も有りし事一
てより改め正して出年流すの初めはくは書し
くらく様もよりし事一もあやほし事一も有りし事一
より改め正して出年流すの初めはくは書し

明和三年丙戌乃冬

伊勢平藏貞丈

五十歳

酒

右の帖紙の被書流く口口口今般流
相傳ひ下りし秘流系抄云約如件

伊勢万助

文化七年庚午七月廿日

夏春

酒

松園清助後系

右五冊ハ雙松亭ハ門外不出の秘本也貞夫之
自筆丹精無比頼者令作其字寫也

天保十二年丑年二月

藤原安作

明治四年身未秋八月既望修齋
渡邊明購得新寫表製了時
適在京都河街邸



